

クラウドナイン



木野花×長坂まき子 スペシャル対談〈前編〉

キャリアル・チャーチルの代表作『クラウドナイン』を、
長坂まき子プロデュース・木野花演出で再上演することになった理由がここに…。

「もう一度『クラウドナイン』を演出したかった」と語る木野花と、30年前に「木野花演出の『クラウドナイン』を10回観た」という長坂まき子（大人計画社長・モチロンプロデューサー）が、その魅力をたっぷりと語ります。

（テキスト＝田中里津子）

▼前半▼

【企画の成り立ち】

——まずは、この企画の起ち上げのお話から伺わせていただけますか。

長坂 なんだか、突然私が木野さんにやりましょう！と企画を持ちかけたみたいな印象になっているかも知れませんが、そもそもは、木野さんのマネージャーである吉住さんからとある舞台の打ち上げで「木野さんが死ぬまでにもう一度演出したいと言っている作品があるんです」ってうかがったことから始まった企画なんですよね。

木野 いや、「死ぬまでに」なんてオーバーな言い方をした記憶はないんですけどね。何かの時に私が「もう一度やってみたいかな」とポツツと言ったのを、気に留めてくれていたんだとは思います。

長坂 その話を聞いた時、私はすぐに「『クラウドナイン』のことでは？」と思いました。

木野 へえ。

長坂 そりゃあ、あれだけの作品ですし。木野さんも何度も演出されていらして。

木野 そう、1985年と86年、そして88年の3回。85年と86年は同じキャストなの。88年は私が“青い鳥”を辞めたあとで、まったく違うキャスティングでやったんです。

長坂 86年は、2パターンのキャスティングだったんですよね。

木野 よく覚えてますね。

長坂 だって本当に素晴らしい作品でしたから。今でも、私の周りであの公演を覚えている方、大勢いますよ。もちろん、それ以降の木野さんの演出作品も素晴らしいんですけどね。それで、きっと吉住さんが言っているのは『クラウドナイン』のことだろうなと思ったら本当にそうだったので、「じゃあ、やりましょうよ」って言ったんです。ちょうどその頃、私も「自分のやりたいことを、なんかやりたいな！」と思っていた時期だったこともあって。それで、すっかりやる気になっちゃったんです。

木野 じゃ、タイミングが良かったんだね。

長坂 良かったと思って、いいんですよね？（笑）。

木野 ふうふう。だって私は、よくぞ引き受けてくれたなと思ってましたから（笑）。

（ここで吉住氏が「その時になぜ『クラウドナイン』の話題を出したかということ、実は長坂さんに「吉住さん、あなたは木野さんをこれからどういう風にしていくつもり？」と言われたからだったんですよ」と告白）

長坂 え、なにそれ、やめてー（笑）。私、そんな言い方しましたか？

木野 「あなた」って言ってる時点で、かなり挑発的ね。

長坂 違いますよ、何かエコライザーかなにかのせいで、間違っただけの聞こえ方になってるんですよ（笑）。

木野 あ、でも私もそれについては声を大にして言いたい。私が言ったことが、みなさんに脚色されて伝わっていることが多すぎる。やたら、盛られて伝わるんですよ。

長坂 ホント、そうなんですよ。

木野 長坂さん何かがにじみ出ているんじゃないの。「タダじゃおかない」的な（笑）。私なんか、この頃、つとめて笑顔ですよ。

長坂 アハハハ、そうなんですか？

木野 以前は、演出をやっている時、稽古場で眉間に皺を寄せたような顔をしていたんだと思う。そうすると「木野さん、今日、機嫌が悪いぞ」って。

長坂 そうそう、言われますよね。

木野 だから最近は、満面の笑みで「おはよう！」って稽古場に入っていくんです。ちょっとどうかというくらい明るさで「おはようございまーす！」って（笑）。

長坂 すごい、大女優！（笑）。しかも私より20も30も年上の木野さんが！

木野 20も30も年取ってるから、こうなったんですよ。無駄に怖がられてる。もっとノビノビやってほしいと思って。でもそれに気づいたのは50代後半でしたけどね。

長坂 あ、じゃ、私はまだ大丈夫だ、もうしばらく渋い顔しておこう（笑）。

【木野さんの演出は、役者を面白く見せてくれる】

——長坂さんは『クラウドナイン』を10回も観ているそうで。そんな人、なかなかいませんよね。

長坂 いえいえ、他にもきつといっぱいいますよ。みんな覚えてるじゃないですか。って、そのみんなって誰のこと？ってなるだろうけど。

木野 みんなって言っても数人でしょ。



長坂 5人くらいかな（笑）。86年の時、キャストが2パターンあったせいもあるんですよ。それぞれ3回ずつ観たので。それで85年の初演は2回観ていて、88年も確実に観ているから、キリのいいところで10回と言っているんです。



——なぜ、そこまで魅了されてしまったんですか。

長坂 やっぱり木野さんは、これは宮藤（官九郎）くんや松尾（スズキ）さんもそうなんですけど、演出で、ちゃんと役者を面白く見せてくださるじゃないですか。お芝居って、まずは役者が輝いていないとダメだと私は思うんです。テーマはどうでもいいんです、役者が面白ければ。

木野 どうでもよくないけどね（笑）。でも実際、私も一番に考えているのが、まず役者がちゃんと舞台上面白く立ってくれること。映画は監督のものだと言われるけど、舞台は役者が答えを出すものだと思っているので。

長坂 映画はカット割りでも。

木野 そう、変わってきますからね。

長坂 だけど、そうやってまず役者を面白く見せようとしてくれる演出家って、意外といないじゃないですか。でも木野さんが演出された『クラウドナイン』は、とにかく本当に役者が面白かった。“青い鳥”の女優さんたちもとても素敵で、私が好きだった伊沢磨紀さんのエドワードとか、とても切なかったですね。ベティ役の巻上公一さんのことも私、大好きでした。

木野 うん、あの時の巻上くんは良かった。

長坂 オープニングから、あの過剰な感じがものすごく面白かった。

木野 歌を歌うことを生業にしている方々って、とってもいいんですよ。私、彼のジェリーに賭けていたんですよ。ジェリーを、ハードロックな感じにしたかったんです。それも演技ではなく、にじみ出る感じでやってほしいと巻上くんをお願いしていました。好きなんですよ、歌う人に役者をやってもらうのが。戸川純さんも大好きだったし。役者とは一味違うハミ出し方をしてくれるんです。

長坂 そうそう、違うんですよ。

木野 アブナイ感じというか。そう考えると、私が好きな役者って歌の仕事もしている人が多い気がする。大人計画の人たちだって、そうでしょう。

長坂 でも、歌手はいないですよ。

木野 え、だけど歌ってるじゃない。

長坂 阿部（サダヲ）くんとか星野（源）くんくらいですよ。

木野 そうなの？ 演技の枠に収まりきらず、外にハミ出ているほうが好きなんです、私。大人計画の人たちって、まさにそういう風に見えた。ハンパなくハミ出している感じに。

長坂 ふうふう、それは光栄です（笑）。

【役者は、自分が作っている壁を破ってほしい】

——今回はキャストも実に面白い顔ぶれが揃いましたね。

長坂 本当にそうですよね。この間、取材で木野さんと高嶋さんに対談していただいたんですが、高嶋さんって選ぶ言葉が極端だから取材現場ではわかりにくかったんですが、記事になったものを読むと、ちゃんと理解されているのがよく分かりました。「ここで笑ってくれみたいな感じでやったら、それはアウト。こっちはこんなに必死にやってるのに、なんで笑うんだって思うくらいの状態でやらないと失敗する」みたいなことをおっしゃっていたんです。まだ稽古にも入っていないのに、台本を読んだだけの段階で。私のように初演、再演で10回観ているわけでもないのに（笑）。こんなにちゃんと理解に至っているんだって思って素晴らしいな、と思いました。ちょっと、不思議な方ですよ。

木野 そう、音楽への造詣も深くてね。ひとつのことを極めていくタイプのようなから、掘り下げ方が深いんだと思う。だから台本も深く読めるんだろうし、私も話をしているうちにちゃんと理解してくれてるなと思いました。

長坂 オープニングの場面とか、これを高嶋さんが演じるんだと思うと、台本で読んでいても既に面白そうです。わりと圧力のある方じゃないですか。このオープニングに、あの圧が加わったらますます面白くなりそう。

木野 この間の対談でも、オープニングの話だけで相当盛り上がっていましたからね。あの場面をやるだけであれっしょいって。

長坂 確かに、あそこの“つかみ”は大切です。

——今回、キャスティングはどうやって決められたんですか。

長坂 木野さんと、出演して頂きたい俳優の名前をお互いに出し合って決めていきました。木野さんがどう思っいていらっしやるかわからないですけど、私は木野さんと思っている方向は同じだなと感じました。「この人はいいよね」とか「その人は違うと思う」とか「その人だれ？」とか言われながら（笑）。だけど木野さんって、あまりご存知ない方でも「その人は、いいね」ってわかるのがすごいなって思っ。

木野 なんとなく、にじみ出てくるものがあるじゃないですか。

長坂 たとえば三浦貴大さんとかは、それほど作品をご覧になっていなさそうだったのに。

木野 なんとなく“今”じゃないかと思っったの。きっつ三浦さんは、次のステップに行きたいと思ってるんじゃないかなと思っったんです。

長坂 別に共演されていたわけではないですよ。

木野 一度も共演はしていませんね、いくつか作品は観ていましたけど。

長坂 私は、ものすごく三浦貴大さんが好きだったんですが、その魅力をなんて言葉にすればいいかわからないんです。ただ観る作品、観る作品、全部いいなと思っつんですよ。たとえば正名（僕蔵）くんも出ていた石井裕也監督の『夜空はいつでも最高密度の青色だ』という映画でも、ちょっと嫌な感じの役がすごく良かったし。ドラマの『リバーズ』、あれは三浦さん以外の俳優の方々も含めてですけど「このバランス、目が離せない！」って思っっていたし。それと『ふがいない僕は空を見た』でもやっぱり、いい人なんだけど実は……という役でね。

木野 あんな嫌な感じもちゃんとやれるんだっていうところは、私も「あれ？」って思っったね。

長坂 そう、嘘くさくなく嫌な感じがすごくいいんですよ。あれ、不思議。でもホント、私、三浦さんの出ている作品を観て、面白くなかったことがないんです。ところで木野さん、今回のキャストでまだ会ったことのない人なんて、います？

木野 いえ、私は伊勢（志摩）さんと共演していますし、穴戸（美和公）さんと（平岩）紙ちゃんは演出も共演もしていますし。

長坂 木野さんに演出された時の穴戸も、最高でしたね。

木野 『ジェット窓から手を振るわ』（月影番外地その2）（2010年）ですね。あの時の穴戸さんは、予想以上でした。

長坂 木野さんは、女優を輝かせる演出家ですよ。本当に面白かった。

木野 伊勢さんとも、月影十番勝負（第十番 SASORIX『約束』）（2006年）で一緒しました。

長坂 あれは（池田）成志さんの演出でしたね。

——『クラウドナイン』の顔合わせは。

長坂 まだなんです。

木野 ええと、いつでしたっけ。できれば、前日にも一応確認してください（笑）。

長坂 ふふふ。木野さんは見た目が美しいから、わかりにくいですけど。

木野 こんなにボケてるとは！って？（笑）。

長坂 アハハハ。

木野 天然ボケとも言われます。よくこれで演出できるなって言われそうですけど、演出の時だけ脳が目覚めるんですよ（笑）。

長坂 同じことを言っちゃったりとかしないんですか。

木野 言ってると思いますよ。逆に昨日はこうだったけど今日はこう、ということもありますしね。そういうことはよくあることなので、あらかじめ役者には言っておくようにしています。だって、昨日見た稽古ではそうでも、1日経てば役者は変わっているんですよ。私も変わるし。そうすると、別のことを言いたくなるので。

長坂 うんうん、わかります。

木野 昨日は右向けって言ってたけど、今日は左向けってこともある。そうすると混乱する役者もいるんですよ。それで「でも、昨日は右って……」とか言い出すと「今日は今日なんだー！」って、昔はすぐ怒ってたんですが。

長坂 ふふふ、やっぱり。

木野 でも今はにっこり笑って「そっちのほうがいいよ」って、役者が傷つかないように言うようにしています。でも結局、場当たりのですね。その場その場の勘が最近冴えてて。自分で言うのもなんですけども。

長坂 ふふふ、前から冴えていらっしやいましたよ！

木野 もはや左脳に衰えが出てきたんでしょうね、その分、右脳がどんどん発達していっているんです。この、左脳が右脳を抑えている感じって、わかります？

長坂 わかりませんよ！

木野 わからない〜？ 私、左脳がちゃんとしてくれない時、ぴゃーって興奮症で熱を出しちゃうような人間なんですよ。子供の頃からしょっちゅう鼻血を出したり熱出したりして。理性で自分の脳を操作しないと危ないので、それでずいぶん左脳を鍛えました。

長坂 へえー。それが最近は？

木野 更年期のあたりから、だんだんどうでもよくなってきて、右脳がむくむくと……。だから最近、大変なんです。

長坂 アハハハ。ああ、木野さんの話はとても面白いのですが役者の話に戻しましょう！



木野 だから私ね、ハミ出しがちな役者が好きなんです。今回も女優陣なんてみんな、こんなにおとなしげな顔しているのに、何をやり出すかわからない人たちばかりじゃないですか。女優にしては地味～な顔、してませんか？

長坂 うん、ウチの俳優たちはみんな地味な顔ですね。

木野 けどとんでもないじゃないですか、この人たち。もう、ワクワクしますよ。

長坂 最近はずいぶん変わりましたしね。

木野 紙ちゃん、いいですよ。

長坂 『月にぬれた手』でも初演から再演ですい分成長した感じがしました。初演は舞台芸術学院の卒業生が集まってやる記念公演（2011年）で、再演（オフィス300による2012年）の時には木野さんもご出演されていて。初演では平岩がちょっともの足りない感じだったのですが、再演の時すごく良くなっていたんですよ。すごく変わったの。ステップアップ、ワンナップ！していくんだなーと思ってうれしくなりました。でも木野さんと一番ガッツリ一緒にいただいたのは、そのあとの“日本の30代”の時ですかね。

木野 『ジャガーの眼』（2015年）ですね。あの時の紙ちゃんは、消化力、吸収力がすごい時期で、いろいろなものを貪欲につかんで次へ行こうとしているなと思っていました。主役でしたし“30代”を背負って立ってた感じがありました。私がやるしかないっていう、がんばりがハンパじゃない。

長坂 その“日本の30代”の稽古をしている時、もう『クラウドナイン』で一緒にすることが決まっていたので、私も稽古を見学しに行ったんですよ。木野さんの演出って、どんなかなーと思って。でも木野さんのおっしゃってらっしゃることを私はわかるんだけど、演出をされている俳優たちのほうはどうなんだろうって思ったりもして。

木野 わかります。役者って3つに分かれるんですよ、なかなか理解できない人と、ちゃんとわかってそれに飛びついて答えを出せる役者と、わかってはいるけど足踏みしちゃう人と。きっと、壁を破るのが怖いんですね。

長坂 壁を破るのが？

木野 私が望むこと、いつも言っていることは、目の前の壁を破ってほしい、自分が作っているその壁をバーンと開放してほしいってことなんです。みんな、破らなきゃいけないとわかっているし、そこに行きたいと思って精一杯やっているつもりなんだろうけど、つい「そんなことじゃ、あんたの壁は頑固だから壊れないよ、死ぬ気でやれ！」って言っちゃうんです。

長坂 へえー。

木野 稽古期間中だけは「家庭も何もかも捨ててくれ！」とまで言いたくなる。稽古が終わったらまた戻っていいから、この1カ月だけは何もかも捨てて、気が狂うまでやってほしくて。そうしないと、面白くないんですよ。

長坂 もしかしたら俳優って、その、言ったらすぐに反応できる人だけで良かったりするものですか？

木野 いえ、常にその中間点をどうするかがポイントなんです。言ったらすぐにできる人は野放しで、ちょっとだけ交通整理してあげればいいんだけど、わかっているけど壁が破れずにいる、その人たちがある意味ドラマを起こすんです。

長坂 へえー、そうなんですか。

木野 なかなかできない人が本番に向けてようやく立ち上がっていき、それまでつかめなかったものを本番の舞台上でつかむわけじゃないですか。そこで気持ちや、花が開くようにうわーって、のっていく瞬間がドラマなんです。お客さんを巻き込む力なんです。

長坂 その瞬間を、『クラウドナイン』で体感したいです！（笑）。

木野 ええ。そこが、演出をやっている「よっしゃー！」って思うところでもあるので。今回のターゲットは、まずは三浦さんかもしれないですね（笑）。



長坂 それ、私も目撃したいです、木野さん！ それもぜひ初日に、花開かせたい。だって今回、（東京公演は）20 ステージしかないんですから。

木野 ええ、なんとか間に合わせましょう！

【キャストの印象】



長坂 ちなみに、木野さんは、正名くんにはどんな印象がありますか？

木野 正名さんとは、ついこの前ちょっとだけ飲みに行きましたよ。でも、まだよくわかっていないかな。
——共演されたことは？

木野 ないです。男性陣とは、入江さん以外は何もかも初めてなんです。正名さん、この間はやる気満々という感じに見えました。口には出さないけど、フツフツと。だけど正名さんがジョシュアをやるっていうのはアリだなんて思いましたね。二幕でキャシーって女の子の役をやってもらうのも、ちょっとすごいことになりそう。だからまったく想像がつかない、というわけでもないです。楽しみです。

長坂 少し待ってみてください、とはすごく思っているんです。なぜかわからないけど、正名くんって最初ちょっとヒヤヒヤさせられるんですよ。だから稽古途中でチェックするよりも、できあがったものだけ観るほうが私はラクなのかもしれない。

木野 ああ、あけっぴろげではなさそうですね。自分をあまり、すぐに出したくない感じがあるというか。

長坂 そうなんです。けどもう15年前あたりから、観るものが全部想像以上に面白いんですよ。といっても、私は常に真ん中に寄せてみるようにしないと面白さがわからないとも思っていて。主役じゃないから、画面の端っこに映ったり、あまり映ってなかったりするじゃないですか。でも私は、ウチの役者を常に中心に据えて観るので。だから、チェックする時はぜひ正名が主役だと思って置き換えて観てほしいんですけど。

木野 では私も、中心に置き換えて観てみますよ（笑）。伊勢さんに関しては、私のほうからどうだろう？と提案したんですよ。

長坂 そうです、そうです。

木野 ある時、今の伊勢さんならイケるかも！ってピンと来たんです。男勝りのソングス夫人もやって、殿方好みのベティもやるということは、そのどっち寄りでもダメで、対極の、生き方の違う女をやれなきゃいけない。伊勢さんって、これまではソングス夫人タイプの役が多かったんだと思うんですよ。でもベティは、古い女の粹の中から飛び出していかなければいけない、人生の岐路に立つ奥様役ですからね。そういう伊勢さんを見てみたいと急に思い立って。そして、今の伊勢さんならできるかもしれない、やってほしいなと思いました。

長坂 実は、伊勢からも「これ、出たいです」って言われていたんですよ。けど「台本を読むだけでは、面白さがわかりませんでした」とも言っていて。だから、大丈夫かなあって思ったんですけど、でもこの台本の面白さがすぐわからないというのは、読み方の問題なんですよ。ウチはあまり翻訳劇に慣れている人がそもそもいないし、勉強もしてきていないので、事前に導入を与えてあげたほうが良さそうだと思って。それで平岩と正名くんと穴戸には先に読み方を提案してみたら、スルッと読めたみたいでした。伊勢ちゃんの場合はその提案をする前に自分で先に読んでいたから、少し読みにくかったんでしょうね。

——その、読むコツ、ヒントというのは具体的にはどういう提案をされたんですか。



長坂 役名がベティとかクライヴとかだから、どうしても外国人を想像しちゃうかもしれないけど、これをタナカとかウエダとかマリコとかヤスオとか、そういう名前に置き換えてとりあえず読んでみて、と。このお芝居は時代背景がどうこうではなくて、いろいろ思い悩んで間違えちゃったり、思い通りにできない人たちが「ああー、またやっちゃった！」なんて思いながら必死に生きている、そんな可愛い人たちの話なんですって言ったんです。そうしたらみんなから「愚かで可愛いです！」みたいな感想が出てきたので、そういう前提が必要だったんだなと思いました。

——それは、観客の方がこの作品を楽しむためにもいいヒントになりそうですね。

木野 そうですね。そういえば私も初演の稽古で役者たちに「二幕はロンドンの公園ではなく、井の頭公園だと思ってやって」って言った気がします。日本が舞台だと思ってやっても、違和感はないですからね。

長坂 宍戸とは、『禁断の裸体』（2015年）と月影番外地で共演していただいたんですね。

木野 ええ。宍戸さんって、自分の中に“オモシロ箱”みたいなものがいっぱいあるような人ですよ。人とは一味違う答えをいつも出してくれて。ここ、ちょっと考えてみてって言うと、意外な方向性で乗っかってくるんです。だからやってて、すごく楽しい。そういう風にくるんだったら次はこうやってみたらって、どんどん足し算になっていくの。

長坂 なにか、空いている部分を埋めるものを持っているんでしょうね。そして、埋める作業を日常的にやっているんだと思います。

木野 とても安心して芝居ができる役者さんです。今回も、さあ、どういう風にくるだろうと、宍戸さんの出方をまず見てみたい。

長坂 入江さんはどうですか？

木野 入江さんは、ご自分で作・演出もできる方で。たぶん入江さんとしては、自分がやりたいことを他ではやってくれないと思っているのかなって、ひとり芝居を何度か拝見して思ったんだけど。入江さんの、あの、ちまっとしているんだか大きいんだかわからないようなところもいいし、あの、隙間を走ってる感じがいいんですよ。

長坂 隙間を走ってる感？（笑）

木野 普通はこういう状況だったらこうやるよね、でもそこを裏切るとこうだよっていう場面でも、入江さんはそれとはまったく違う方向から答えを出してくる気がするんです。かといって、ちゃんとやれと言われればやれちゃう。常識の枠をハミ出さずにもやれるんだけど、でもそこで溜まった何かを吐き出したい

場所が、ひとり芝居なのかなって思います。今回は、その入江さんのまともな芝居もできつつ、ちょっと変じゃない？っていう部分、その両方が使える役どころなので、ワクワクします。

長坂 木野さんは、入江さん演じるハリーという役は笑いのセンスのある人にやってほしいと前からおっしゃってましたからね。単にダンディな感じで出てきてもしようがない、と。私は、入江さんのことは昔、劇団 SHA・LA・LA の旗揚げの頃から存知上げていて。いつも心がちょっとニヤニヤしているような方なんだろうなと思っているんです。人を笑わせたいと思われている方だろうな、と。私はこの間初めて、入江さんのひとり芝居を観に行っただけですよ。

木野 あら、そうですか。

長坂 なんだか同年代の男の人たちがいっぱい観に来てて。私もその人たちと同年代だから「なにこれ、同窓会？」って思いましたけど（笑）。ホント、懐かしいネタ満載で、そのまま同窓会気分で楽しみました。

木野 ふふふ。あれを毎年やるっていうのは、きっと頑固なんじゃないかな。根深いこだわりが入江さんの中にあるように思いますね。

長坂 終わった後に楽屋でご挨拶した時、入江さんがすごく平和な感じだったんです。自慢するでも謙遜するでもなく。だいたい私の周りって、基本的にちょっと卑屈な感じの人が多いですから、ああ、こういう方とお仕事するのって新鮮でいいなあと思いました。

——石橋けいさんに関しては、いかがですか。

木野 けいちゃんは“城山羊の会”に出られていたのを初めて観た時、「意外にそんなことを普通にやっちゃう女優さんなんだ」って驚いたのを覚えていますね。結構、性的な際どい演技を要求されていたんだけど、それを味噌汁でも作ってますくらいのセンスでやっていますすごいなって思ったの。普通はベッドの上でやっていますというところなのに、台所に立ってる感覚だったというか。だから観ているこっちが、あまり恥ずかしいと思わずに観られて。そういう不思議なセンスの持ち主だなと思いました。その後もいろいろな作品に出ているのを観ているうちに、抱えている問題がありそうだなってということも伝わってきました。

長坂 それは女優としてですか。

木野 女優としてですね。人としての問題なんて、私には手に負えませんよ（笑）。女優として破りたいものがあるんだろうなって感じが、いつごろからかな、見えてきて。今回ならそれが破れるんじゃないかと思ったんです。私の中では、そういうものを抱えている役者が何人かいたほうがいいというのがあって。芝居が動くから。既に面白くできあがっている人より、今、壁を破りたいと思ってる役者が数人いたほうが、エキサイティングで、ハラハラして、目が離せなくなる。それに、けいちゃんならキャスティング的にもピッタリなんじゃないかと思いましたしね。

長坂 そうですよ、なんとなく想像できます。私は石橋けいさんのことはほとんど存知上げないんです。もちろん面白い女優さんだとは思っているし、すごくいろいろな人が気にされている存在だとは思っていましたが。今はまさに、舞台に限らずいろいろなジャンルの方が“石橋けい”って面白いんじゃないかかって予感を持っているような時期だと思いますし。でも実際にお会いした時には「自分をチャホヤしてください」みたいな感じがまったくない方でした。そういう女優さんとは長くお付き合いしたいですからね。普通に話ができる女優さんという印象でした。



後半へつづく・・・